
懔獄門の門番

紅このは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

懺獄門の門番

【Nコード】

N9531S

【作者名】

紅このは

【あらすじ】

序章 最強の超能力者…超能力が存在する世界、ソロノアで生まれ育ち、ソロノア最強の超能力者である紫苑。サイコメトラ彼は目の色が異端であるという事と、その能力の異常さによりいつも命を狙われていた。その日も、手慣れた様子で刺客を始末し終えた時、紫苑の世界は暗転した。

第一章 懺獄門の門番…セラートという魔術の存在する世界へ飛

ばされた紫苑は、森の中の移籍で四人の悪魔と出会う。「お久しぶりにございます、我が御子」彼らが言うには、セラートこそが紫苑の生まれた世界で、紫苑は生まれてすぐに空間の歪みにのみ込まれてしまったらしい。紫苑は神の血を引いており、今は滅びたオデアリア帝国最後の皇族。そして魔界と地上を繋ぐ扉、“プリズン・ゲート 懐獄門”の門番となるべき義務を持っていた。門番になれば“悪魔”を使役できる代わりに命を削る事となる。しかし、門番となる事ができるのはオデアリアの名を持つ己だけ。門番がいなければ、悪魔達が地上へあふれ出す。紫苑は門番となるべく、“プリズン・ゲート 懐獄門”を採す旅に出るのだった。

※「神々の箱庭」の第五作目です。他の作品と同時進行で執筆しています。世界観が違っているので、他の作品を読まなくてもおそらく問題ありません。

00：登場人物（前書き）

随時更新です。

00…登場人物

●紫苑^{しおん}●十七歳

童顔で女顔。体型は男であるため男にも見えなくはないが、初対面では確実に間違われる。濡れ羽色の髪に真紅の瞳。戦闘時や他人相手では冷静である事を心がけているが、気を許した相手の前では結構天然な所を見せる。とはいえ中身は真っ黒。他人と話す事が少なかったため、人付き合いが苦手。優秀な超能力者^{サイコメトラ}で、恐らくソロノア最強。実はセラートの神ユアンの息子、イアンの子孫（曾孫くらい）で、寿命はかなり長い。その影響で十五歳くらいから体の成長が止まっている。……それ以上に幼く見えるのは元々童顔であるため。魔力は桁外れだが、魔術よりも超能力に特化しているためほとんど悪魔達の食料と化している。育ての親は蘇芳^{すおう}というオッサン。万が一能力が使えなくなった場合を想定してあらゆる武道の訓練を受けている。

（悪魔）

●グレディアシス●

暗い赤色の髪をした青年。筋肉質な体つきだが、ゴツイ感じではない。肌は日に焼けたような健康的な色をしている。目つきは鋭いが、単に細いだけで睨んでいるわけではない。身長は大体百九十センチくらい。火の魔術を得意とする。外見年齢は二十代後半くらい。

●ファリレウス●

角度によって濃くも薄くも見える青い長髪的青年。男にしては細身で白い肌。優しげな顔をしていて物腰も柔らかいが、相当な腹黒。剣を扱うなら力ではなく技術で敵を翻弄するタイプ。^{テクニク}水の魔術を得意とする。外見年齢は二十歳くらい。

●ハントレアス●

こげ茶色の髪に、左右に一房ずつ薄茶色の髪が混じっている。体格はグレディアシスとファリレウスの間くらい。無表情で、いかにも無口そうな外見をしている。右目が髪で隠れているので、余計に表情がわかりにくい。土の魔術を得意とする。外見年齢は二十五歳くらいの青年。

●モルティリス●

発芽したばかりの芽のような淡い黄緑色の髪の少女。レースの服がよく似合うほど人形のようにかわいらしい。人見知りで誰かの後にいる事が多いのだが、その立ち振る舞いは隙がない。風の魔術を得意とする。外見年齢は十代前半くらい。

01：超能力者（前書き）

タイトルの読み方は「プリズン・ゲート」です。
すみません。読めませんよね。

そのまま「りんごくもん」でもOKです。

01..超能力者

闇のような漆黒の外套を翻し、数十メートルもあるビルから飛び降りた。危なげなく着地した青年——紫苑しおんには傷どころか痺れさえない。

外套よりも青みを帯びた濡れ羽色の髪は少々癖っ毛で、先の方が踊っている。瞳の色は血のような赤だ。いや、赤というよりは真紅と表現する方が良いかもしれない。

ちなみに、この辺りの人間は皆黒髪黒目が一般的である。ごく稀に異なる者もいるが、茶色や灰色や紺色といったものばかり。真紅の瞳は珍しいを通り越して“ありえない”色だった。

とはいえ、紫苑の目が真紅あかい事は変えようのない事実である。当然と言うべきか、どここの孤児院も紫苑を進んで引き取ろうとはしなかった。雪の日に置き去りにされていた当時生まれて数ヶ月の紫苑は、様々な施設をたらい回しにされた。どんな些細な不幸であっても、全く紫苑とは関わりのない事であっても紫苑のせいにされた。

“悪魔の子”———そう呼ばれたのは何回だったか。

そんな紫苑を拾って育ててくれたのは、蘇芳すおうと名乗る正体不明の

オッサンだった。一緒に暮らしていた紫苑でも、何らかの組織に所属していたらしいという事ぐらいしかわからない。

蘇芳はよく家を留守にした。そして、帰ると必ず「たっだいまあゝ！ 良い子にしてたか、紫苑」と言っただけで笑ったものだ。紫苑という名も、蘇芳につけてもらったらしい。本人は記憶にないのだが。



このソロノアには、超能力という力がある。超能力は炎や水といった自然を操る力ではなく、例外もあるが人間や物を対象とした技だ。

超能力は誰もが扱える訳ではない。適性がなければ、石一つ動かす事はきかないのだ。

もちろん、石を動かすというのは一例だ。それに、適性の有無は機械などで調べる事ができず、自然にその能力が現れるのを待つしかない。自分の能力に気付かずに死んでゆく人も少なくなかった。ある意味、それは幸運な事だろう。

能力者というものは嫌われ者だ。

確かに能力を使って犯罪を犯す輩やかもいるが、そのほとんどはやられない限り手は出さない。“やられたらやり返せ”どころか“やられたら百倍返し”な考えをしている人が大半であったが。

まあ、目に見えない未知の武器を隠し持っているようなものだ。恐怖を覚えるのも頷ける。しかし、仲良くはできなくとも理解ぐらいはしてほしい。能力者の数は少なく、出会うのは九割が普通の人間なのだ。しかも、能力者皆が味方であるとは限らない。能力者狩りを楽しむ頭のおかしい能力者も少なくはなかった。

彼らにだって心はある。周りの人皆に敵対心に向けられたら、壊れたっておかしくはないのだ。能力者にとって、出会う人皆が敵である。そのくらい警戒していないと命がいくつあっても足りない。

なぜ紫苑がこんな事を考えるのかというと、彼も超能力者サイコメトラーだから。蘇芳も優秀な能力者で、制御の仕方は彼に習った。蘇芳亡き今、俺の味方は誰一人いない。今だって、逃走中である。



パシッと音がして、飛んで来た形のない“力”が見えない壁にぶつかった。前者は念動力^{サイコキネシス}、後者は防御結界^{シールド}だ。

紫苑はすぐさま能力を発動した。そこにあるはずのビルが、車が、全てが紫苑には透^すけて見える。紫苑が逃げたのはこの範囲内に奴らを誘い込むため。

テリトリー
絶対領域。

ある特定の範囲内の事が手に取るようにわかる。ただそれだけの能力。侵入者防止などには役立つだろうが攻撃などは一切できない、結界型の技。

奴らも気付いたようで二つの能力に驚いていたが、所詮は結界型と、気にせず近付いて来た。

だが、甘い。

普通、能力者が扱える能力は一つだ。二つあれば天才である。

が、紫苑の能力は未知数だ。紫苑自身でもわからないことが多い。今のところ使える能力は七つか八つだったか。これから見つかる可能性だってある。

紫苑は奴らを絶対領域内へ誘い込むと同時に、廃墟へ移動していた。ここなら辺りを気にしなくて済むし、何より武器が多い。

紫苑の能力の一つに“念動力”がある。念動力は物を手を使わずに動かすというもののだが、紫苑のそれはもっと強い。生き物の体にも干渉する事ができた。

つまり、相手の位置さえわかっていれば離れた場所から、例えば頭や腹なんかを潰す事もできるのだ。

ただ、できるというだけで使いたくはない。直接触っている訳ではないから感触はしないが、何というか生々しい。臭いやその姿が醜いのだ。必要に迫られない限りは使おうと思えなかった。怖いのではなく、気持ち悪いから。

だから、鉄骨や瓦礫の多い廃墟へ移動した。一応武器も持っているが、それは最終手段だ。手入れも面倒だし、使わずに済めばその方がいい。一応、法律では武器の所持を禁じているし。まあ、守っている人なんて生まれたばかりの赤ん坊くらいだろうが。

紫苑は奴らの近くにある鉄骨を動かす。死角であるため、相手は気付いていない。

圧倒的に有利な立場であるが、紫苑は気を抜かなかった。一瞬の油断が命取りになる事もある。絶対領域テリトリーのような能力から身を隠す能力だって存在するのだ。物事に絶対はない。

それに比べて、奴らの気の緩みようといったら。

この時点で、既に決着はついたようなものだった。

02…実力差

超能力は、物語の中の魔法のように、魔力のようなものを使わない。能力者にとって超能力とは体の一部だ。小さいうちは感情の乱れにより暴走する事もあるが、基本的には教わらなくても手足のようには動かせる。思うように動かせずよく暴走させていた紫苑の場合は、能力が強すぎて体と合っていなかったただけなのだ。

その超能力の発動を感じるのには難しい。気配を感じるようなものだから、余程勘が鋭いか訓練していないと無理だ。普通は相手の動作を見て判断する。が、奴らに紫苑の姿は見えない。

紫苑が力を発動させると鉄骨は奴らの腹に、足に、腕に刺さった。胸を狙わなかったのは、殺すつもりがなかったからだ。

全員が動けないのを確認し、近くにあったカーテンらしき薄汚れた布で口を塞いだ。そして、彼らのすぐ近くへ瞬間移動する。テレポート

奴らは全部で四人。能力はCクラス三人とBクラス一人。随分なめられたものだ。

能力というのは、腕についている腕輪型の機械で表示される。それ以外にも顔写真とか名前とか。謂わば身分証明書だ。つまり、奴

らは政府に属する、もしくは政府に認められた超能力者サイコメトラというわけだ。

俺はこいつらのように登録していない。能力が特殊な上に強いから、登録なんてしたら良いように利用されるのが目に見えている。そういう訳で測った事はないが、恐らくX———計測不可能だろうと蘇芳が言っていた。

「政府の犬か」

俺の呟きに、奴らは肩を震わせた。

この腕輪を持った能力者は、同じ能力者から嫌われる。「飼われる事を選んだ犬」と。

俺としてはどうでもいい事だ。そいつがその道を選んだのなら、それでもいいだろう。こいつらみたいな臆病者は大嫌いだが。

「さあ言え。なぜ俺を襲った？ 誰の命令だ」

もし俺の能力がバレているのなら、先程のような油断はしなかったはずだ。単に知らされていなかっただけかもしれないが、Bランクというのはある程度地位も高い。俺にとっては雑魚でも、この国

で十本の指に入るか入らないかの實力だ。

「誰が言うものか」

少し布をずらしてやると、Bランクの男が吐き捨てるように言った。舌でも噛みそうな勢いだったので再び布を噛ませる。

「Bランクなだけはあるな。他の奴らとは大違いだ」

俺はこういう奴の方が好きだ。後ろで震えている奴らとは覚悟が違う。

『俺の能力について上は知っていたか？』

今度は精神感應テレパシーを使って訪ねた。普通は一方的にしか使えないが、俺の場合は相手が思った事を読む事もできる。勝手に心の中をいじると壊れるから、こうやって聞く事が多い。

いきなり声がして混乱していた男は、数秒で落ち着いていた。

『誰が言うかと言わなかったか』

その言葉に、俺は眉を寄せた。

『お前、自分の立場を理解しているのか』

コイツは真面目すぎる。

俺は奴らの一人に指を向けた。

『何をするつもりだ!?!』

元気な声が響く。話せるように加減したから当然なのだが、案外タフな奴だ。

『選べ。仲間の命か、質問に答えるか』

俺だって生きるのに必死なのだ。ここには敵が多すぎる。

なぜ生きるのか、その理由はわからないが————強いて言うなら予感、だろうか。

『くっ……仕方ない』

長い葛藤の後、男は言った。この場には男の恋人もいる。それを知った上での脅迫だ。

『俺達は知らされていなかった。……が、今思えば三河^{みかわ}様はご存知のようだった』

三河、か。

あいつは政府の中でも真ん中辺りの地位だったはずだ。まだ上がいると見た方がいいかもしれない。



俺は四人をそのまま政府の施設の前まで瞬間移動^{テレポート}させた。殺しても良かったのだが、死体の処理が面倒だったのだ。

さて、これからどうするか。

政府を潰すのは簡単だ。しかし、あんな腐った政府でも、なくなれば色々と不都合がある。奴らが俺を狙う理由は実験体か人間兵器か、もしくは危険と判断して始末するつもりか。

まあ、多少しんどいだけで敵ではない。何もする必要はないか。

政府としては屈辱だろうが、それが現実だ。

よし、そうと決まればねぐらへ帰ろう。

俺が足を踏み出した時、世界がグニヤリと曲がった。

03：異世界

次の瞬間、紫苑は見覚えのない場所に立っていた。青々と生い茂る木が心地良い風に揺れている。

ここはソロノアではない。

紫苑がそう確信するのに、時間はかからなかった。

ソロノアにこのような美しい森が残っているはずがないのだ。度々降る酸性雨によって、豊かな自然は失われてしまった。そして何より、雰囲気が違う。

どこか懐かしい空気。

紫苑は、自分が今まで生きて来た理由がここにあるような気がした。

「ここは異世界なのか」

超能力の中には瞬間移動のような、空間型の能力がいくつか存在

する。そのため、ソロノアには異世界の概念があった。尤も、恐らくソロノアで一番能力の高い紫苑であっても、力が足りず異世界へ移動する事などではしないが。

ここへ来てしまったのは事故だろう。ごく稀にだが、空間が歪む事があるらしい。以前、その中へ数人が飲み込まれた。生存者は空間型の能力を持った超能力者^{サイコメトラ}ただ一人である。

今回は偶然にも、ソロノアの歪みとこの世界の歪みが重なったという事か。

紫苑は思考を巡らせていたが、ふと音がしなくなった事に気が付いて顔を上げた。森の中で何の音もしないのはおかしい。風もいつの間にか止んでいる。

「あれは……」

木々の向こうに、遺跡のようなものが建っていた。随分古いようで、壁には蔦が巻きついている。所々くずれているが、立派な遺跡だった。

「懐かしい」

つぶやいてから、紫苑は首を傾げた。

ここは異世界だ。それにソロノアでも、こんな遺跡は見た事がない。それなのに“懐かしい”だなんて……。

しかし、やはり紫苑は“懐かしい”と感じた。この森も、遺跡も、空気も。

———おや、オデイリアの子だよ。

———失われたものと思っていたけれど。

———帰ってきたんだね。

———私達は歓迎するよ。

耳をくすぐるようなささやき声が聞こえて、紫苑は辺りを見回した。

———ここだよ、ここ。

——見えないのかな。

——この世界に馴染んでないのさ。

——ずっといなかったからね。

“声”は口々に言う。全て同じ声なので、何人（？）いるのかはわからない。

——遺跡の中へ入ってごらん。

——継承すれば見えるようになるよ。

——元々あれはオディリアのものだからね。

——さあ、中へ。

紫苑は頷くと、遺跡へ足を進めた。“声”に言われたからではない。紫苑は誰かに言われたからする、というのが嫌いだった。ただ、自分が気になったから。“声”に言われなくても、自分から入っただろう。

———おかえり。

———おかえり、御子様。

遺跡に入った途端聞こえた声に、紫苑はくすぐったさを感じた。おかえり、なんて言われたのは何年ぶりだろう。蘇芳が死んでから、また、蘇芳と出会うまで一度も聞かなかった言葉だ。なぜ“おかえり”なのかはわからないが、心地良い言葉に、紫苑は深く考えなかった。



遺跡は相当広いらしい。この遺跡が一体何であるのか、見当がつかない。

まず、外観や中にある部屋からして城ではない。城ならもっと立派に造るだろうし、一つ一つの部屋がもっと大きいはずだ。実際に城を見た事があるわけではないが、もしこれが城であるとするならば、紫苑が見た部屋は全部使用人や兵士の部屋なのだろう。

同じような理由から、神殿でもない。城や神殿ならば中庭があったり、長くて広い廊下があったりして、ゆったりした造りなのではないかと思う。でもこの遺跡の廊下は狭くてすぐ曲がるし、中庭のようなものも見当たらない。まるで迷路のような造りだ。

物語ではよく、広い建物を“迷路のようだ”と表現する。それはきっと、どこも同じように見えるからだろう。あまりに広すぎて。

でも、この遺跡は少し違う“迷路のよう”だった。どこも同じように見える、というのもそうだが、とにかく曲がり角や行き止まりが多いのだ。まるで“迷わせる事が目的”であるように。

しかも、全てが同じ色だ。床も、壁も、天井も。部屋の中以外は全部レンガのように四角い石でできていて、砂のような薄茶色一色だ。ドアはどの部屋も濃い茶色一色である。装飾も一切ないツルツルのドアで、ネームプレートもなくドアノブしかついていない。ここで何年生活しても迷いそうだった。



しばらくして、他とは明らかに違う場所へたどり着いた。恐らく最深部へ続く道だろう。両側の壁に絵が描かれている。

絵は黒いコウモリのような羽をした人達が人間を襲う、というものだった。黒い羽の人々は“何か”を人間から奪っているようである。

やがて、一人の男が誕生する。たぶん救世主とか勇者みたいなポジションにいる人だ。男は黒い羽の人々を大きな黒い扉に閉じ込めた。それから後は幸せそうな人々の様子ばかりだったが、途中から人間の醜い様子も現れ始めていた。

人間とは、忘れる生き物である。それは素晴らしい事だ。嫌な事を忘れないと、前に進む事はできない。しかし、“感謝する事”を忘れ、今ある幸せを当たり前のように感じ始めると、後は落ちぶれてゆくばかりである。

この壁画には、それがわかりやすく描かれていると紫苑は思った。

04..悪魔

たどり着いたのは、今までとは比べ物にならないほど大きな部屋だった。

窓はなく真っ暗だったが、紫苑は入った途端パツと明るくなった。どういう仕掛けなのかわからないが、紫苑は気にしない事にした。異世界なのだから、今までの常識は通用しないと思った方が賢明だろう。

部屋の壁に、石でできた棺のようなものが並んでいる。全部で四つだ。

『其れは地獄の業火———グレディアシス』

『其れは無形の清水———ファリレウス』

『其れは不動の大地———ハントレアス』

『其れは諸刃の烈風———モルティリス』

石の棺に書かれていたそれを、紫苑はつぶやくように、小さな声で読んだ。見た事のない文字だったが、なぜか自然に読む事ができる。

不思議に思い首をひねった紫苑は、彼には珍しい事に固まってしまった。

棺の蓋が開いたのだ。

中から現れたのは三人の青年と、一人の少女。

「お久しぶりにございます、我れらが御子^{みこ}」

四人が同時に膝をついて頭を下げたので、紫苑はますます混乱した。一体どういう事だろう？ 紫苑とこの四人とは、初対面で間違いない……はずだ。

紫苑が疑問に思っていると、立ち上がった四人のうちの一人が言った。

「覚えておられぬのも無理からぬ事と存じます。御子様はまだ生まれて数日でしたゆえ」

生まれて数日……？つまり、紫苑が孤児院の前に置き去りにされる前だろうか。ならば、この四人は両親の知り合いか。

一番右に立っているのは、赤い髪をした青年だ。赤と言っても紫苑の瞳のような真紅ではなく、黒っぽく暗い色だった。四人の中で一番筋肉質な体つきで最も男らしいが、ゴツイ感じではない。無駄のない筋肉の付き方をしている、という感じだ。肌は日に焼けたような健康的な色だった。目つきが鋭いが、ただ単に細いだけだろう。身長は百九十くらいありそうだ。正直羨ましい。

右から二番目は青くて長い髪 of 青年。角度によって薄くも濃くも見えるその髪は、すごく不思議で神秘的な印象を受ける。他の二人の青年よりも細身で、白い肌だ。……さすがに少女ほどではないが、優しい顔をしているが、中々腹黒そうだと紫苑は感じた。隙のない立ち方からして武道もできるのだろうが、どちらかというインドア派だろう。魔術とか。剣を使うなら、力より技術テクニクといったところだ。

その隣の青年は、茶色い髪をしていた。ベースはこげ茶色なのだが、左右に一房ずつ薄茶色の髪が混じっている。無表情で、いかにも無口そうだ。体格は赤髪の青年と青髪の青年の丁度中間辺り。真面目で、命じられればたとえ何日、何年でもじっと立っているような雰囲気である。一番頑固そうというか。右目が髪で隠れているので、余計に感情がわかりにくい。

少女は少し顔を赤らめ、茶髪の青年の服をつかんでいた。人見知りなのだろうか。髪の色は黄緑で、萌黄色というのだろうか。発芽したばかりの芽のような淡い色だった。大体十代前半くらいで、身長は百四十後半。恥ずかしそうにしながらも、他の三人同様隙がない。紫苑も幼い頃から最強を誇っていたし、偏見がなかったからすぐに気がついた。

四人に共通しているのは、瞳が金である事だ。これは何か意味があるのだろうか。

そして、羽がある。黒い、コウモリのような羽が。……あの壁画のように。

「御子様は生まれて三月と経たずこの地を去られたので、ご存知でない事も多いかと存じ上げます。私達わたくしがご説明してもよろしいですか？」

青髪の青年が言った。

「……ああ、頼む。後、もう少し碎けてくれ」

「わかりました。しかし、敬語をやめる事はできませんので」

まあ、先程までの話し方よりはいいだろう。堅苦しくて窒息しそうだった。

「ここは遠い昔、我々悪魔が封印された地に建てられた遺跡です。ここに来る途中、壁画を見ましたよね？」

紫苑は頷いた。

「あの壁画はこの世界——セラートの歴史です。悪魔と人間の戦いは実際にありました。我々悪魔は人間の魂を糧としますから、自然の成り行きと言えるでしょう」

「悪意に染まった魂ほど美味いって言うから、極上の魂を作るために悪魔がはびこってましたし。当時のセラートは地獄絵図でした」

赤髪の青年も言う。見たような言い方だし、きっと実際に見たのだろうが、彼にとってはどうでもいい事のようにだ。

「悪魔を魔界へ追いやり、閉じ込めたのがリアン。セラートの神、ユアンと人間の間に生まれた息子です。彼は後にオディリア帝国を築きます」

……オディリア？聞いた事があるような気がする。

「その子孫が御子様、貴方です」

「……は？」

「オデイリアの一族は長寿ですから、曾孫くらいですね。ちなみに悪魔が封印されたのは数千年前の事です」

オデイリアの一族———そうだ。遺跡の外で聞いた“声”が言っていたのだ。結局あの“声”は何だったのだろうか。

紫苑は自分を落ち着かせるために、大きく息を吸った。

05：理由

四人（実際には二人）の話をまとめると、紫苑は神の血を引く人間であるらしい。紫苑の身体能力の高さや超能力の才能は、そこから来ているのだろう。神の驚異的な回復力は、紫苑の自己治癒セルフ・ヒーリングという能力に現れている。寿命も不老不死ではないが、普通の人間に比べると圧倒的に長いのだ。実際、紫苑の体の成長は十五歳で止まっている。

……とまあ、納得できる要素はあるのだが、だからどうというわけではないので気にしない事にする。一応人間の血の方が濃いし、分類としては人間になるのだから。ただ、彼らが紫苑を“御子”と呼ぶのはこのためだった。

悪魔という生き物は、主に人間の魂を主食とする。負の感情の強い人間ほど美味しく感じるらしく、悪魔達は目当ての人間の妬み、悲しみ、怒りといった感情を育ててから食べる。数千年前は、それが問題になった。

しかし、あくまで魂は主食である。別に食べるものは魂でなくとも生きて行けるのだ。

魂に代わる悪魔の食料とは、魔力であった。

魔力とは万物が宿す命の力で、人間や動物達はもちろん、植物や小さな石にさえ宿っている。命の力であるために全て失うと死ぬし、減れば体がだるくなるのだが、少しくらい減っても問題はない。その魔力を魂よりも好んで食べていたのが、彼ら四人と配下の悪魔達であつた。

そもそも、悪魔というのは実力社会である。その中で最も位が高いのは、火、水、土、風、氷、雷、木、闇の魔術を得意とする八人の悪魔だつた。彼らを“上位悪魔”と言う。紫苑の前に立っている四人も上位悪魔で、それぞれ火、水、土、風を操るそうだ。

さて、当時悪魔は二つに分かれていた。人間の魂を好み、悪意を持って人間へ近付く悪魔。魔力を好み、自然のものや動物、時には人間から必要なだけ食べていた悪魔。後者の悪魔達は前者の悪魔を毛嫌いしていたが、わざわざ止めようとしなかった。人間を助ける理由がなかったから。

そこに目を付けたのがリアンだ。リアンは神とのハーフなだけあって、尋常ではない力を持っていた。しかし、一人で何千何万もいる悪魔をどうにかするのは難しい。そこで、魔力を好む悪魔達に協力を要請したのだ。条件は、魔力の提供。神の血を引くリアンの魔力は美味で、あまり頻繁に食べる必要がない悪魔達の腹を満たすには十分な量があつた。

悪魔達の封印の役目をする扉は“プリズン・ゲート 懺獄門”という。リアンは悪魔

達を封印する際、いくつかの決まりを作った。

- 一、全ての悪魔は門番の僕しもべとなる。
- 二、全ての悪魔は門番の許しなく“ブリズン・ゲート 懺獄門”を通る事ができない。
- 三、全ての悪魔は門番の許しなく力を振るう事ができない。
- 四、もし門番が悪魔の力を悪用した場合、“ガンゼル”によって断罪される。

これにより、悪魔が自力で出て来る事も、外にいる悪魔が力を悪用する事もできなくなった。そして、万が一ユアンの血を引く者——つまり、リアンの子孫に悪魔を悪用しようとする者が現れた場合、それ相応の罰が下ることだろう。

リアンは悪魔達を魔界へ封印した後、オディリア帝国を作った。現在帝国は滅びているが、素晴らしい文化を持った大国であつたらしい。その皇族唯一の末裔が紫苑。両親にもらった名前はアークレイ・カザシス・オディリアという。

「大体はわかったが……セラートで生まれた俺がなぜソロノアにいたんだ？」

それに、なぜ悪魔が四人も“ブリズン・ゲート 懺獄門”の外にいたのだろう。

「今から十七年前、“ブリズン・ゲート 懺獄門”を狙う人間が当時の門番——御

子様のお父上を亡き者にしようを企みました。戦いの中で大規模な魔術が多用され、その余波か、空間に歪みができてしまったのです。まだ生まれて数ヶ月だった御子様はその中へ……」

今回のように飛ばされてしまったというわけか。

「その組織を根絶やしにする事は成功したのですが、お父上は重傷でした。お父上は“ブリズン・ゲート 懐獄門”に一時的な封印を施し、私達をここに眠らせました。貴方に“ブリズン・ゲート 懐獄門”の知識を伝えるために」

「後の事はオレ達にはわかりません」

紫苑の父には、幼くして異世界へ飛ばされた紫苑に必要な知識を与える時間が残されていなかったのだろう。紫苑が戻って来る事を信じて、彼らをここへ残したのだ。“ブリズン・ゲート 懐獄門”の事を知らない俺が、きちんと使命を果たせるように。

「ブリズン・ゲート “懐獄門”の封印は、門番がいなければ成り立たないのです……」

少女が紫苑を見上げながら小さな声で言った。少し慣れてきたようだ。

「どういう事？」

「えっと……“プリズン・ゲート 懺獄門”の封印は門番の許しなく外へ出られないというもので、扉自体は自由に開け閉めできるんです。だからもし、門番がいなかったら……」

「魂を好む悪魔がセラートへ出て来る、か」

「はい」

だからこそ“一時的な封印”なのだろう。

「オレ達の眠りは、名前を呼ぶ事で覚めるようになってたんですよ。ほら、蓋に書いてあった」

「グレイディアシス、ファリレウス、ハントレアス、モルティリスっていうやつか？」

「はい、それです。我々は封印の後、進んでリアン様の配下へ降りくだりました。ですから、貴方の僕しもべでもあります。他の上位悪魔は寝首を搔かこうとすると思うので、注意してくださいね」

青い髪髪の青年———もといファリレウスが言うが、なぜそんな

るのだろう。

「リアンの配下へ降った経緯は聞かないが、なぜ俺の僕^{しもべ}って事になるんだ？」

前後の言葉から、封印の“決まり事”とは関係がないようだ。

「御子様はリアン様の魂をお持ちですから」

……本日何度目かの爆弾を投下されたのだった。

06 母親

「……何で、そんな事がわかるんだ？」

「悪魔は魂を食べる生き物ですよ？魂の質や波動の違いでわかります」

紫苑はどう反応したいいのかわからず、苦笑を浮かべるしかなかった。いきなり先祖返り（文字通り）だなんて言われても困る。実感もないし、この話はもうやめにしよう。

「それはそうと、門番にはどうなるんだ？」

紫苑の父親が施した封印が、いつまでもつのかわからない。早めになった方がいいのではないだろうか。

「私達は“その時になればわかる”としか知らせておりません」

「何だそのいい加減さは」

血が覚えているという事だろうか。……いや、彼らの言う事が本

当であれば、紫苑の場合は本当に覚えていてもおかしくはないのだが。

「で、プリズン・ゲート“慄獄門”はどこにあるんだ？」

「どこにでも」

どこにでもって。

「プリズン・ゲート“慄獄門”は常に移動しててんです。決まった場所にあるわけではありませんから、オレ達には答えかねます。門番であれば呼び寄せる事もできるはずですが。ただ、オディリアの一族であればどこにあるかわかるはずですよ」

赤髪のグレディアシスが言う。

「どこにあるかわかる……か」

紫苑は目を閉じた。そういう本能みたいな感覚は、余計なものが
見えない方がいいだろうと判断しての事だ。絶対領域テリトリーのような探知
能力を使う時もそうだった。始めは見えないものが見えるようにな
るといふのに慣れなくて、目を瞑らなければ気が狂いそうになった
ものだ。

「ん？……これか」

紫苑は光の糸のようなものを見つけた。心臓の辺りから赤く輝く一ミリほどの糸が、遺跡の外へと伸びている。

「遺跡の外にあるみたいだな」

「どの方角かわかりますか？」

「ここでは無理だ。一旦外に出ないと」

糸はどういう訳か、壁を避けて通っていた。障害物の多い建物の中では、方角を知る事などできはしない。

「そうですか。では、外へ出ましょう。これからの事も考えなければならいでしょう？ 私達は御子様に従いますので」

そうなのだ。元々セラート出身とはいえ、紫苑はこの世界の事をあまりに知らなすぎる。それこそ小さな子供でさえ知っているような一般常識もわからないのだ。もちろん、知り合いなどいはいはしない。悪魔達に人間の常識を聞くのはどうかと思うし。

何をするにしても、とりあえず外へ行かなければならない。ここには生活するためのものがないし、神の血を引くとはいえ食料が確保できない場所で生きる事はできないのだ。

——誰か外にいるよ。

外でも聞いた声に、紫苑は目を瞬いた。相変わらず見る事はできないが、精霊のようなものなのだろうと素直に耳を傾ける。

「外に？」

——女の人だね。時々来てるみたいだけど……。

紫苑は首を傾げ、警戒しながら来た道を引き返し始めた。



遺跡の入り口にいた人物は、紫苑にとって予想外の人だった。

「アーク！アークレイ！」

目に涙を浮かべた女性が何とも言えない表情で声を上げる。

髪は艶やかな黒。ほどけば腰辺りまであるだろうそれを、器用に結いあげてある。身なりは質素だが清潔で、安定した生活をしている事がうかがえる。こちらを見つめる瞳の色は深い緑で、年をとってなお輝く美しい熟女だった。

何となくピンとくるものがあって、紫苑はつぶやいた。

「母さん……？」

「ええ、そうよ。私の愛しい息子。こんなに大きくなって」

今まで血のつながった血縁の存在など考えた事もなかった紫苑は、突然の事に固まってしまった。頭の隅の冷静な部分が、今日は驚く事が多いと苦笑している。

「あの人を疑っていたわけじゃないけど、もう会えないかと……あ

あ、本当によかった」

彼女が心から言っている事がわかって、無条件の愛情に居心地の悪さを感じる。

こんなにも温かい人が自分の母であるなんて。すっかり血の色に染まった息子を、この人はどう思うだろうか。

紫苑は物心ついた時から命の危険にさらされていた。そのため、走るようになると同時に人の殺し方も学び、実際数えきれないほどの命を奪ってきた。蘇芳は危険な任務を受ける事が多く、いつ自分がいなくなっても生きて行けるようにと、紫苑を徹底的に鍛えたのだ。時には、その任務を手伝う事もあった。今の紫苑に、人の命を奪う事に対する抵抗はない。

肉親に会えた喜びよりも不安に押しつぶされそうになった紫苑は、母の抱擁にも反応する事ができなかった。

腕の中で身を固くする紫苑に彼女は苦しそうに顔を歪めたが、それも一瞬の事で、ほろほろと涙を流し始めた。

「よく無事で……っ！本当に、本当に、よかった……！」

泣き崩れる初対面と言っても過言でもない母親に、紫苑はただ呆然としていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9531s/>

懐獄門の門番

2011年5月24日13時32分発行